

地域に根ざす「篤エネルギー家」から地球環境を学ぶ

石山 俊・熊澤 輝一・佐々木 夕子・増田 頼保・山口 昌英・中西 昭雄

■ 参加者

増田 頼保：福井県旧今立郡今立町（現在越前市）出身。

福井県立武生工業高校卒、慶応義塾大学通信教育学部文学部史学科中退。旧今立町に晩年住んだ芸術家河合勇氏に師事。今立現代美術展実行委員長も務め（1979-1997年）、1981年スペインに渡り画家として活動。1986年に帰国後、町内の古民家を拠点に創作を続けながら、自然エネルギー普及活動にも携わる。協同組合プロードに参加し製作した、風景に調和する風力発電機「エオリカ」は、平成10年度新エネルギー大賞・財団法人新エネルギー財団会長賞を受賞、平成16年度第3回産学官連携推進会議で、『科学技術政策担当大臣賞』を受賞する。（特）森のエネルギーフォーラム副理事長、いまだて遊作塾代表、福井県小水力利用推進協議会事務局、福井県立大学非常勤講師、仁愛女子短期大学非常勤講師も務める。協同組合プロード：<http://www.ecoprod.jp/>



山口 昌英：福井県今立郡池田町出身。山形大学工学部卒。ホンダエンジニアリング株式会社に勤務。故郷池田町に戻り、2003年に有限会社 JASTY を起業。専門の機械設計技術を生かし薪ストーブ、ペレットストーブの製作販売も手掛ける。料理や床暖房にも使用できる個性的な製品の開発する発想は、自然に恵まれた池田に根差した生活を送るからこそ生まれるものである。



有限会社 JASTY：<http://www.jasty.jp/>

中西 昭雄：福井県武生市出身。滋賀大学経済学部卒。中西木材株式会社代表取締役。三代目社長として、福井県産材の利用促進に日々奔走する。「経済人」の立場から、まじめで柔軟な発想をもとに、本業の製材の他にもさまざまな製品を生み出す若き社長。麺類好きでもあり、「社長ブログ (<http://www.n-wood.co.jp/blog/>)」にはかなりの頻度で麺類がアップされる。最近ではトレイルランを初めているらし



く、週末は山を走っているそうだ。中西木材グループ：<http://www.n-wood.co.jp/>

佐々木 夕子：神奈川県横浜市出身。2003年に JICA 青年海外協力隊・村落開 発普及員としてニジェールの農村地域で活動し、2005年からはグループ派遣隊員のリーダーとして村落地域で活動する隊員の活動支援や取りまとめなどを行う。その後京都大学大学院に進学しサヘル地域の人々の暮らしや生業、農村における情報伝達構造など、フィールド調査を通して明らかにした。地球研では「砂漠化をめぐる風と人と土」プロジェクトの研究者として西アフリカ（ニジェール、ブルキナ、トーゴ）、南部アフリカ（ナミビア）で調査、研究を継続（2012～2015年）。現所属は国際協力機構ニジェール支所企画調査員（2015年～）。

石山 俊：東京都世田谷区出身。東京農業大学卒業後、砂漠化対処 NGO「緑のサヘル」駐在員としてチャド共和国に赴任。後、静岡大学大学院、名古屋大学大学院でアフリカ乾燥地における人々の生活とその変容を研究する。2004年より2008年まで、福井県今立郡今立町（現越前市）南坂下集落の古民家に居住し、環境 NPO 活動、地域おこし活動に携わりながら農的生活を営む。2008年より総合地球環境学研究所。アルジェリア、スーダン、ブルキナファソを中心にフィールドワークに基づく研究に従事。

熊澤 輝一：東京都墨田区出身。東京工業大学大学院では、都市近郊の里山保全に向けた協働と合意形成のプロセスを、フィールド調査と計算機モデリングを通して明らかにした。修了後は、大阪大学にてサステナビリティ・サイエンスの知識を構造化する研究を、立命館大学にて炭素貯留野菜により農山村振興を図る事業に従事した。2011年より総合地球環境学研究所。環境問題や地域づくりで使われる言葉同士のつながりを「見える化」することで、ワークショップや円卓会議でのファシリテーションを支援するための手法開発を行っている。

※座談会参加者プロフィールは2015年3月31日時点。上記6名の他、増田 智雪さん（増田 頼保氏夫人）も座談の輪に加わった。



■ はじめにーなぜ篤エネルギー家か？

熱心な農業者を指すのに「篤農家」という言葉が使われる。篤農家という語が用いられ始めたのは明治末

期のことで、当時は農業改善と農村発展に資する自作農のことを指していた(中山 2009)。しかし、篤農家を「熱心な農業者」という現代的意味合いでとらえた場合、農業が主要な生産基盤であった日本において、地域史に名を残さなかった篤農家も多数いたことだろう。現代においても多くの篤農家が熱心に農業を営んでいることは、農村にかかわりをもつ研究者ならば誰しも知っている。

篤農家は、地域社会の中におけるキーパーソンでもある。それは、篤農家が農業技術を探求するだけでなく、地域住民間の関係性を円滑にし、行政や外部者と住民の橋渡しをする役割を持つからである。現代の篤農家とは、「農業を熱心に営みながら地域発展の原動力となりうる人」である。食糧自給率がわずか 40% 程度の現代日本において、篤農家を持つ経済的、社会的、文化的役割の重要性は、将来に向けて益々高まっていくであろう。

篤農家というとらえかたは、農業に限らず、漁業、林業といった生業においても応用が可能であると私は考える。また第一次産業に限らず、あらゆる活動(生産という形をとらなくても)においても、「篤」を持つ人々が地域の未来構築に果たす役割は益々重要になるであろう。

こうした考えから、「篤エネルギー家」というこの座談会のテーマが生まれた。お集まりいただいた、3 名の「篤エネルギー家」は、2004 年から 4 年間続いた私の福井県での田舎暮らしの中で出会った人々である(石山 2013)。そして 3 人をつなぐキーワードは「自然エネルギー」である。

参加者プロフィールにも記されるとおり、増田さん、山口さん、中西さんは、福井県を基盤にして自然エネルギー、特に木質バイオマスエネルギーの未来可能性を、実践をともないながら模索している人々である。それぞれの生い立ち、経験、職業は異なるが、3 名の活動は密接に関連している。

この座談会を通じて福井の篤エネルギー家 3 人から地球研は何を学ぶことができるのか。それは「地域の論理」ではないかと私は考える。地球環境問題研究をマクロとミクロの 2 つの手法にわけるとすれば、この座談会で語られたことは間違いなくミクロ的である。マクロな地球規模考えた場合、ミクロ的視点は一般化が困難であるゆえ、かなりじれったい手法である。しかし、ミクロ的視点の有用性は、「人間の息遣いが聞こえる」点にあると私は考える。地球環境は人間だけのものではないことは確かであるが、地球環境問題において人間の存在を無視することはできないし、重要なカギを握るのもまた人間である。

人間、社会のミクロ的息遣いをどのように地球全体にスケールアップするか、という困難な課題を抱えながらも、地球規模の全体論では見えにくい「地域の論理」を学ぶことがこの座談会の目的である。

■ 対話の記録

材木屋と薪ストーブ設計師が語る森の現在、過去、未来

石 山：まず中西さんにお伺いします。中西さんには地球研第 45 回市民セミナー(2011 年)に講師としてお越しいただき、経済人としての立場から福井県産材のカスケード利用、県産ペレット利用のビジネスモデルなどについてお話いただきました。その時の話では、補助金があるから、ペレットボイラはコスト面でも石油といい勝負になってきたことを紹介いただきましたね。ところが、その後補助金は廃止された。地球研で講演いただいた、4 年前と 2015 年現在のペレットボイラととりまく変化というのはどうなっているのでしょうか。

中 西：補助金がないっていても、結果的に補助金みたいなものはあります。たとえば、再生エネルギーの買い取り制度が出てきた。そうなってくると高い値段で売れることになります。でも結果的にそれは国民にそれぞれ負担をしてもらうことになります。つまり通常の価格より非常に高い価格で買い取ってもらうことになったのです。太陽光も最近ではそうなっています。しかしそのような制度がいつまで続くのかについては非常に微妙です。

総論を言うと、現段階では補助金がないことには成り立たないことには変わりはない。ただ 国民意識として再生可能エネルギーが認識されてきていると思います。そういった意味において、新

しい自然エネルギーモデル、たとえば薪ストーブとかペレットストーブを使おうという考えも定着すると思います。

その際、山口さんが今やってらっしゃるような、自伐林家や木の駅プロジェクト¹を通じて薪やペレットを調達することも身近になってくるのではないのでしょうか。

石 山：自伐林家とは何でしょうか。

中 西：自伐林家というのは、自分の森の木を自分で伐採してそれを売り出していく人々です。

中 西：このような状況が広がりつつあるから、それが全体的な動きになれば、面白いですね。でも、現段階では市民運動の域から脱しない気がします。薪やペレットがいわゆるエネルギー政策の根幹になるってことはたぶん難しいでしょうね。

それはそれで別にかまわないのです。なぜならば、そういった安定的な自然エネルギー供給は小規模でやっていけるし、そうじゃないところについては、ポイントを絞って、めりはりを効かしてやるべきじゃないかなって僕は思います。限りあるエネルギーですから。

熊 澤：ペレットを基幹エネルギーにする制度的な面と、自伐林家の経営という2つのむずかしさがあると思うのですが。

中 西：そのあたりは山口さんの方が詳しいと思いますけど。うちはどっちかという、より安定的に木材を出す立場にいるので。

熊 澤：どのように社会の仕組みを変えていったらいいのでしょうか。

中 西：山のエネルギーっていう、自然エネルギーの部分で限定するならば山に入っていけないと取れないわけじゃないですか。山に入っていこうと思ったら、山に向かって道を作っていく必要があるし、民有林が多いから民有林の用地買収という問題もある。民間の自発的なレベルでそうした問題を解決するのは難しいじゃないですか。どうしても行政的な部分が必要になります。基盤整備に対しては、国のお金、県のお金、市のお金、つまり税金を使わざるを得ない。だから行政面の呪縛からは逃れられないと思います。

僕はよく県の人たちに言うのですが、“森を整備するっていうことは国土保全っていう部分だから国土を保全するためには税金を投入するのは当たり前でしょう。だって道路建設・保全に税金使ってたから、林道整備するなんて国の金使えばいいんじゃないの？使わなきゃいけないんじゃないの？”。安定的なエネルギーが必要であれば、森林保全という目的でちゃんと国が主導するっていうやり方をしていけないと、民有林なんだから、民間のあなた方が自発的な努力でもってやんなさいよっていうことを国民に投げかけてもそれは響かないですって、絶対。商売成り立たないんだから。

山 口：私の方からはもう少し小さいスケールの話をしたと思います。今、反省を求められているのは高コストの問題です。これまで主流だったのは、高性能林業機械をもって1億円ぐらいの投資をかけて林道を整備して入るっていうやり方でした。でも1億円程度の投資をしても4人ぐらいの雇用にしかならない。しかも高額な機械を買ったら、それを償却しなきゃいけないので、原木市場に高いノルマがかかるわけです。だから利益追求になって山の将来ってことをあまり考えない。やっぱりいいものを間引きしながら伐っていくことが必要です。林業ってものは何世代も受け継いでいくものだから、市場原理のみでやってこうと思うと無理が生じる。今やっているの木の駅プロジェクトというのも曲がり角に来てるのね。

1 木の駅プロジェクトとは、森林整備と地域通貨による地域再生の仕組みである。その目的は大規模投資なしでも可能な林地残材を有効利用することにある。高知県の事例をモデルとして、2008年以来全国で30以上のプロジェクトが始まっている。

木の駅プロジェクトでは1立方メートルあたり6千円で引き取ってもらっていましたが、でもそのうち、3千円ぐらいを補助でまかなわれていたのですね。でもやっぱり続かなかった。薪で販売すれば付加価値が、4～5倍アップするから薪で販売してやろうっていうこと試したのだけど、それでもなかなか続きませんでした。

先日高知県行って、中嶋健造さんという方から興味深い話を聞きました。そこでは自伐林家が持つのは2トン車、4トン車、場合によっては軽トラ、あと軽林内作業車だけで作業を進めます。それほど大きな林道つけることもありません。こうした試みを実際もうやってるのだけでも、採算が取れるらしいのね。

それを集約して1つの森林組合とかに頼んでやると、返ってくるお金っていうのはわずかなものになってしまいます。だけど自分が実際山に入ってやると、成り立つよっていうのを実証してるのですよ。まあある程度は面積持ってないと駄目だけど、長い目で見ると、これからはそういうスタイルが望ましいって言っているのが中嶋健造さんです。このあたりの林業は、それほど大規模というわけではないのだけど、林業用重機は2千円万程度する。最低でもユンボぐらいは要るわな。これだけでも3、4百万するでしょ。

中 西：機械だけだね。

山 口：だからそれを投資して林業やるっていうのは結構大変なんです。それでもできてはいるんだけど、あんなもん機械いれて、“があっ”て切って、“ぼあっ”て切るのはいいんだけど、ここらは冬は山に入れない土地柄だし。まあ一年中山入れる地域にしても、1億円出して、4人しか雇用できなくて、しかも1日当たり何十立方メートル生産しないと成り立ちません。もう過重労働になるらしいわ。採算取ることが第1条件になっちゃうので、山主から借りて、とにかく伐る山だけ確保したら、あとは野となれ山となれみたいな世界になっているのです。

佐々木：限界ありますよね。4人って。

山 口：機械のメンテナンス費用と燃料代がまた年すごい金額になる。今、国はどっちかっていうと高額投資型の林業を推奨てるんだけど、“ちょっとおかしんじゃないの”っていう言い方をしてるのが、中嶋健造さん。僕もまあそう思います。高額投資を前提とする木の駅プロジェクトは遅かれ早かれ暗礁に乗り上げるでしょうね。

中 西：山からの安定的な資源の搬出と、継続可能な山の経営っていうことは長期的視野に立ってやらなきゃいけないでしょう。山を全体見て管理・利用計画をたてる“フォレストラー”という職業がヨーロッパにはあります。日本でもコーディネーターが必要だっていうのは気づいてるのだけれども、山に精通して山はどうあるべきかっていうことを、林家の人に、きちっと説明できる説得力のある人間はいない。

仕方ないから行政側としては補助金をどかんと入れて、ぶわっと材木を出すってことに専念しちゃっているのです。そこに長期的視野をやろうという動きがちょっと欠落しているのは事実。

石 山：そういう人材を養成する計画はないのでしょうか。

中 西：いや、養成したいねっていう議論はあります。

石 山：多くの人がそういうことを考えているのでしょうか。

中 西：もちろん考えていますよ。長期的な林業経営のためにどうあるべきなのかということ、ヨーロッパに見に行こうというようなことまでは明言化はされてる。

佐々木：それは林野庁ですか。

中 西：林野庁のなかで。近い将来にはそういったモデル的なことはやるんじゃないかなと思います。それでパイロットケースにはなるかもしれないけど、それが日本国全体に広がっていくのかっていうことになると、わからないですね。先に山口さんおっしゃるように、それよりも目の前の山の木がど

うにもならないから、そっちの議論が先行しちゃって、そこが取り沙汰されてるっていうのは事実です。いっぱい、いっぱいになっちゃって、もう頭回らないみたいな。

石 山：もしフォレスターみたいな職業ができて、地域、国全体の長期ビジョンができるとしたら、中西さんの仕事内容も変わってきますか。

中 西：うちは基本的に福井県下の山の生育状態に合わせた形で、やっていくっていうのが根本にあるから、あまり変わらないかもしれません。

ただ大規模製材っていわれる合板工場とか、年間何万立方メートルってつぶすような会社は、材を集めなきゃいけないんだから必死でしょう。工場回んねえから。

石 山：さっき中西さんの工場で聞いたときに、製材したものの単価は大きな工場で作られたものの方が安いと聞きました。

中 西：でもそれは自分でそうしたのではなくて、林野庁がそうしてくれってお願いするからやってる部分も大きいと思います。だから何十億ってお金突っ込んで、結果的に破たんするケースもたくさんある。

山 口：そういう感じやね。

石 山：対照的に中西木材の経営のスタイルと規模なら、今のシステムが変わっても成り立っていける展望があるのでしょうか。

中 西：いや、これまたまた難しいのです。マーケットがあるじゃないですか。まあ薪もしかり、エネルギーっていう政策もしかり、住宅分野での資材もしかり。そしてユーザーの志向があるじゃないですか。そのなかで価格競争力が出てくるのはどうしても海外の材料。うちらがあるべき姿や理想論掲げて、“これは適正に山を継続・発展させるためにこれぐらいのコストは頂いて、山に還元しなきゃいけないんですよ”、って言っても、今度受ける側が、“日本の山をうんぬんくんぬんよりも自分の生活のほうが大事なんだから、いい家が欲しいんだと、安くていい家が欲しいんやと、同じようなスペック、能力を持ってもっと安い、安定的な外国の材があればそれでよい”。

佐々木：そういう人もいますよね。

中 西：だって知らないんだもん。日本の木がどうか。

石 山：地球研市民セミナーで講演してもらったときに強調した点はそこでしたね。日本の山の将来を担うのは消費者側の問題でもある。

中 西：ただ、少しずつそれが変わってきているっていうのは事実ですね。

石 山：最近、消費税が上がったとか、年金支給額もすごく厳しくなってるじゃないですか。

中 西：厳しくなっている。だから背に腹は代えられない部分があって、“いいのはわかってんだけどね”、っていうことになる。

石 山：高知の中嶋健造さんが提案する2トントラック方式のほうが山の持続性を考えれば適切なのでしょうか。

山 口：いや、それはプロの林業家からすれば、“そんなかったるいことやってられんわ”ということになります。しかし自分の山を持っている人は山に対する思いがあるじゃないですか。将来にわたっても山を維持していきたいっていうなかでやってるわけだから、けどそういう人は多額の投資はできない。

みんなで林業機械を借りてもいいんだけど。コンバイン借りるみたいに。

越前町の江波地区ではそういうやり方をしていました。何人かでチーム作って、林内作業車とかを共同購入しています。なかには1人だけで機械をあんまり持たずに吊ったり引っ張ったりしてやってるような人もいるらしいんだけど。いろいろですね。

中 西：昭和20年代以降、ほんとに日本のエネルギー事情っていうのはこんな石油依存度が上がりました

ね。それ以前はほとんど木炭でした。そのエネルギーの根幹は山なんだから、急激に変わり過ぎちゃったっていうのが事実じゃないかなと思うんですよ。うちの山だって、3～4年ぐらい前に自分で山行ったら、あちこちに炭焼きの跡があったんですよ。

山 口：ああ、昔は転々として炭焼きしたからね。

中 西：それだってよくよく考えれば、結局あんな重たいもの山からよう降ろさんもんやから、山で炭にして軽くして持って下りるって、合理的な方法です。

山 口：うちの山でも炭焼き跡が2つぐらいある。あれは何十年周期でまわしていたんでしょ。こっちのほうはまだ伸びたら、戻ってくるみたいな。

増田智：だけど、私らのの子供の頃はまだ、掘りごたつとかさ。知ってる世代やね。山口さんも知ってるやろ。

石 山：炭の掘りごたつでしょうか。

増田智：中西さん世代だともう知らないでしょう。

中 西：いや、実家は使ってた。うちは使っていない。

山 口：昔は循環サイクルのなかにある状態で使ってたわけ。

中 西：どっかでなんかスイッチが変わったんですよ。そこがいつか、なぜか。

山 口：林業に限らず市場主義経済でももう暴走してるでしょ。だから環境を破壊し尽くしている。そういう状態をさらに、アベノミクスは煽ろうとしてるけど、資源が枯渇してる状態のなかであんなことしたって限界がある。林業だって同じような状態になってるわけ。

中 西：社会インフラの整備はしっかりと国がやるべきだって僕は思う。そのための税金をわれわれは納めて、社会インフラ整備すればいいと思ってる。山だってそうでしょ。だから民有林っていう觀念だけでも、その出てくる産物は社会インフラなんだから、それを国民も理解してしなければいけない。山の所有者だけでなく、消費者も。そういう時期に来てるんじゃないのっていうのが私の持論。

石 山：それにそういう人材をちゃんと育成していく必要もある。

中 西：そう。具体的に、技術的にね。

山 口：問題は山がないところでしくみを考えていることです。田舎にいて、野山を、畑しながら考えていたら誰でもわかることなんや。それがわからないで麻痺している。それともう1つ、経済の論理が問題です。金のもうからない話は駄目なんですよ。抹殺されるのですよ。食にしてもそうでしょ。肉食べないほうが健康にいいって決まっているけど、そんなこと、国の行政としてやったら、食肉協会から反対食うし。

石 山：今日の午後に中西さんの工場を見学させてもらって面白かったのは、今、手を広げているんなことやってる。でも、それは、本業がなかなかもうかってこなくなかった結果であるということなんです。経営的には、成功ではないんですけど、生き残っていく力を蓄えるっていう意味では、やっぱりいいきっかけなのかなと思いました。

芸術家が語る森の価値

石 山：では増田さんの話を伺いたいと思います。増田さんは、野岡(越前市野岡町)の生まれですね。町中の野岡地区から、農村の大平集落に住み始めたいきさつを教えてくださいませんか。

増 田：ご存じのように、昔は山に芝刈りに行く世代だったですね。

私の実家の後ろにはお寺があって、その裏はずっと山が続いていました。その山に行くと、杉の葉っぱがたくさん落ちていました。子どものときにはそれを拾って歩くのが仕事だった。それをお風呂の焚き付けにしていました。そうするとお小遣いがもらえました。最初は10円ぐらいだったでしょうか。小さいころから、火を使うことをやってたんですね。

20歳頃になって、ニューヨークから河合勇さんという絵描きさんが、大平からもうちょっと上の八石集落の分校(今立町立岡本小学校八石分校：1971年廃校)に住むことになったのです。そして絵画教室をするという話をたまたま聞いたのです。

絵画教室に通っていると、河合さんが、冬になると寒いからっていうんで、ドラム缶ストーブを作ろうやないかっていう話になりました。

そして試行錯誤を経て薪ストーブが出来上がったのですが、私は子供の頃から薪風呂に慣れていたので別に違和感もありませんでした。自分の生活そのものは、木と一緒に生活するっていう、まあそういうスタンスがあった。

その頃は、高度経済成長期で、なんかいろんなものが、だんだん技術的にも革新していくような時代だったのです。

ただ木を使って生きることは手放したくないって思っていました。うちの親が、その頃かまど式のそのお風呂をやめてボイラー式に変えたんですけれども、それからその家に、愛着っていうのがあんまり感じなくなったのです。

今いるところは、僕の母親の実家なんですけれども、おじさんに当たる人が、僕が4-5歳の頃、この大きい梁のところへロープを掛けて、ブランコを作ってくれたことがあったのです。もうそれがずっと頭のなかにありました。で、そういう田舎の家の大きい空間とか、これ非常に憧れていたのです。

でも、おじさんがその後東京に出たので、この家は40年以上誰も住んでなかったんですよ。

1981年からスペイン行って、6年ほど住んで、2人目の子どもができたので帰ってきたんですけども、せっかく住むんなら、ここの場所をアトリエに使えないかっていうんで、おじさんに頼んだら、せっかく空いてるから、使えばいいよっっちゃうことを言ってもらいました。

もともとはここ茅葺きだったんですけど、でも、そんなときにはもう、屋根も葺き替えて、“棟下ろし(ムナオロシ)”って言って、2階の部分を増築して瓦にしてあったんです。屋根の茅を取って2階部分をつけ、付け足したみたいな形になった。かまども無くなっていて、灯油ボイラーでお風呂を焚くようになっていましたが、まだ囲炉裏はありました。この家140年ほど経ってる古い家なんです(写真1)。

あっちこっちガタがくるもんですから、手前味噌で自分で直したりしてまして。そんな話を、中西さんとか、当時この近くに住んでいた石山君とか、いろんな人に話したら、それをイベントみたいにやったら面白いんじゃないかっちゃう話になりました。それで遊作塾っていうのを立ち上げたんですよ。遊作ってのは遊ぶに作るって書くんですけどね。

そんなときには、町内の紙漉きの人間国宝の岩野市兵衛さんとか、武生在住の薬師寺を直した直井光男棟梁といった人たちに、師匠になってもらって、一般人とそういう匠との交流を通して、そういう匠たちの生き方っていうのを学んでもらおうっていうことをやってたのです²。

佐々木：今もやってらっしゃいますか。

増田：まだ少し続けてます。そのコンセプトを福井県立大学の授業にしました。匠と現代っていう授業にしてるんです。15回シリーズで。

福井県立大学にアフリカ研究者、杉村和彦(教授)さんという方がいるんですけども、僕と彼が中心になって、遊作塾の以前にNPO法人森のエネルギーフォーラムというのを作りました。そのNPOメンバーが中心になって、遊作塾を作った。

職人っていうのは、あんまり高学歴じゃない。けれども、すごい哲学というか生き方を持つてる

2 今立遊作塾の詳細は増田ほか(2009)年を参照。



写真1 越前市の典型的農村家屋。この家屋は増田家のものではなく石山がかつて住んでいたもの

人が多いわけですよ。どちらかっていうと中卒みたいな方もなかにはいて、それでも、やっぱりその道を極めてる人たちがいますから、学歴だけではない世界っていうのが別にあるっていうことを、やっぱり若い人たちにも知ってもらって、“そういう生き方もあるんだよ”ということ、同じ作業をするなかで、感じ取ってもらいたかったのです。

そんなことをやってるんですけど、何につけてもお金がかかるような時代ですから、ちょっと 資金的に今は行き詰まっていて、休憩している感じです。ただ、町内の岩本という地区にある明治期の貴重な伝統建築物を、NPOで取得して、なるべく保存できるようにするといいなって考え、登録文化財にまではしたんですね。

森のエネルギーフォーラム作ったいきさつは、森林資源の有効活用を考えようっていうことになりました。それで関心がある人々に声を掛けて、いろいろ話をしたり、炭焼き体験なんかもしました。

ここから東へ上った山中にハツ杉森林学習センターというのがあるのですが、そこは、僕らが20代のころにはなんにもなかったんですけど、オールナイトのロックのコンサートを開催していました。

それがだんだん少し定着して、ここの町長をしていた人が、その場を自然公園にする計画をしたのです。そうした経緯で森林資源を使った学習センターができました。そういう拠点が、うちの周りにあるわけで、そういうのをうまく民間的でも活用できるといいなっていうんで、いろいろお手伝いもしてまいります。

まず炭焼き体験1ぺんやってみようっちゅうことで。木酢液がどういうふうにとれるかとかね。ほいで、メンバーのなかには、その木炭を使った田植機とかコンバインを作る人が現れてきて、非常に面白くなっていきました。

ロボットを使った排水管掃除の仕事をしてる人が、ダットサンのトラックを木炭自動車に改造してね、走らせてたりもしました中々車検通らないっていうんで、やめちゃいましたけど。



写真2 木炭田植え機のデモンストレーション

でも普通の農業機械だったら車検の制度がないので、田植機に木炭動力を乗せたのです(写真2)。一釜焚くとだいたい4時間フル稼働する格好になってました。で、同じしくみで、発電機に入れてやれば、電気を発電できるっていうんで。結構、優秀なものになった。今は、足利工業大学のところへその発電機は行ってますけど。なかなか世話するのも大変なんでね。

薪ストーブ・ペレットストーブービジネスと暮らしー

石 山：増田さんとのつながりは山口さんが東京から池田に戻ってきてからでしょうか。

山 口：池田に戻って周り見ると木ばかりなので、木関係のことをやりたいなと思って、調べたら、“森のエネルギーフォーラム、あれ、南坂下”ということで、増田さんに電話したのかな³。それからですわ。で、それで、中西さんとかとも知り合いになった。

増 田：うちの薪ストーブを見て、山口さんが、自分でも作ろうって思ったらしくて(写真3)。

山 口：あれはね、きっかけは県からけしかけられたっていう面もあります。機械設計をやったんで、薪ストーブもできるだろうっていうんですよね。で、



写真3 増田さんが自作した薪ストーブ

3 南坂下集落の古民家は石山の住居であったと同時に NPO 法人森のエネルギーフォーラム、いまだて遊作塾の活動拠点でもあった。

急遽補助金の申請書を出して通りました。あとでえらい目に遭ったけど。

石 山：それで、作んなきゃいけなくなっちゃった。

山 口：そうそうそう。それがきっかけ。中西さんから、ペレットストーブとか作ってほしいって話もあったけど。

佐々木：そのペレットストーブを作る際にやっぱり欧米のものを参考にされたのですか。

山 口：そうです。欧米製のやつをいっぱい見ました。でも、深く突き詰めてみるとどれも電気使うし製品管理の問題もありました。製品は 1,000 台でも少ないっていわれてるけど、ある程度まとめて作って、納めたあとは品質の責任とかしなきゃいけないんですよ。そうなるとある程度規模の大きい会社じゃないと、ちょっと手つけられないし。しかも手離れ悪いし。価格の問題も考えなければいけません。

日本でも使えるモーター付けて、ほかにもいろいろ付けて日本仕様にするとう経済的に合わなくなります。

イタリアの場合、石油がリッター 260 円ぐらいしてる。中東に近いからもっと安くしてもいいんだらうけど、政策的に化石燃料使わないようなシステムになってるんですよ。

向こうは、石油系のもの買う人が 1 割も、1 パーセントもないという。変わり者が買うだけって。だから、もうほとんどペレットストーブとか薪ストーブに行くのですね。僕が不思議に思ったのは、日本はイタリアよりも人口 2 倍もあるのに日本では成り立たないっていわれる。向こうには結構な企業が何社もあるし。で、なぜ向こうは成り立つのだろうって。

向こうで結局、イタリアに本拠を置く日系会社が日本に結構けしかけています。だけど日本仕様への改造を考えるとなかなか大変です。たとえば 60 機種を 3 機種から 6 機種くらいに絞って、日本仕様にしてもらうんですよ。そうすると最低 50 か 100 台にまとめなきゃいけない。それをロットで頼むと、それを置くための倉庫が要るでしょう。

しかも、イタリアではカデル、MCZ、エディルカミンなどのメーカー、それ以外にもドイツのオルスバーク、オーストリアのものもあります。メーカーが乱立してきてるんです。だから投資して、採算取れるかどうかちゅうのはね、結構危ない。うちらも、やらないかって言われたことがあったのですが、僕ら、もうとてもそんだけ投資するつもりはないし。その会社と心しななきゃいけないでしょ。

販売のノルマがあるわけですよ。成績悪いんなら、ほかの代理店に乗り換えるっていうのは、向こうの勝手だから。やっぱり 3 年間で何台売れるかというようなことも言ってくると思う。だから、輸入元になることは単純なんだけど、ある特定のところの輸入元、日本の総輸入元になると、それだけのやっぱノルマがあるわけですよ。

そうすると、ほかにもいいものがあったとしても、取りあえずそのメーカーのものを売りたいので、勧められるようになるでしょ。僕らみたいに、変なもん作ってる会社っていうのは、それだけでまあ睨まれます。

やっぱり好きなものメーカー問わず選んで売りたいってのがあるので、代理店となる選択肢はなくなりました。

まあダッチウエストとかね、ヨツールとか、ある程度国内で認知されて、代理店もきちっとして、ある程度販売も乗ってるところはいいけど、そこまで乗せるまでが大変だ。商品の魅力自体がなかったら、もうどうしようもないし。

ヨーロッパ、北欧のほうなんかでね、電気が必要な暖房器具を買うことは、死活問題になると思います。ライフラインが途絶えると、生命の危険につながるような寒い地域の場合は、国の政策、国とか町の政策として、絶対 1 つは電気が不要なもの入れなさいという地域があるらしいんですよ。

日本なんかまだ、布団に丸こまってるやなんとかなるだろうけど。

うちのおふくろなんかこまいから、今でも豆炭を使う。今のIHって、豆炭起こそうと思うと、センサー付き、全部センサー付きなっちゃったでしょう。だからIHでは無理なんです。

石 山：火が起きないんだ。

山 口：起こせないんですよ、ほんで、石油ストーブの上に鍋乗っけるやつがあんだ。あれは、火起こしてきんだね。あれで火起こして、豆炭か使ってくるんでりゃ結構暖かい。商売柄家にも薪ストーブあるんだけど、80歳のおふくろとか、よう使わんで。そこまで最終的には考えないとだめです。停電しないとも限らないし。こんだけ雪降るところは、いつ、送電線が切れるかわからんし。

石 山：山口さんが作る薪・ペレットストーブは停電しても動くんですか。

山 口：50ワットぐらいしかないんで、ちょっとした発電機あれば、だいたい動く。

石 山：それ、やっぱそこを考えて作った。

山 口：いや、そこまで考えてないんだけど。ペレットストーブっていうのは、こういうペレット供給するのと、送風と、排気と、ファンがあるんだ。モーター、最低3つ以上使ってるんですよ。だから、定常運転時でも130ワットぐらい要るんですよ。ほんで、着火にはヒーター使うでしょ。400ワットぐらい要るんだ。で、これは、もう初めから終わりまで50ワットぐらいの、モーター1個だけなんでね。普通のバックアップ電源でもしばらくもつし、普通のポータブル発電機でももつし。案外、東日本大震災でもう結構ポータブル発電機という、エンジン式の発電機っちゃうのは、結構すぐ普及したらしいんで。

ほんとと言うとね、そんな普及するつもりで作ったものじゃないんですよ。どうしても薪ストーブ設置できない家っていうのがあるんで。

石 山：それは、どういうことですか。

山 口：屋根に煙突が出せないとか、雪が落ちて来る面に設置したいとか。家を建てただけで、最近、ほら、高気密高断熱の家で、普通の薪ストーブが入れられない家があります。たとえば、FPの家とか。

石 山：FPっていうのは。

山 口：FPの家といって、高気密高断熱で部屋の密閉度まではかるような家がある。Flame & Panelの略です。それだと、今の薪ストーブって、外気導入っていうのがあっても、エアタイト（高気密）構造じゃないんですよ。

うちの製品も完全にエアタイトじゃない。今、ドイツの規格では唯一あるんだけどね。そういう時間あたりの漏れ流量が数立方メートル以下っていう規格で作ったすごいのある。

石 山：でも、家って、そんなに高気密にする必要はあるんでしょうかね。

山 口：それは問題ある。

山 口：高気密にする必要がないかもしれない。

石 山：だって、この増田家だって。

増田智：隙間だらけや。

山 口：だけど、家が高気密で、薪ストーブ・ペレットストーブを入れられないって悩んでるところは多いんです。建築確認申請出すとき、図面に薪ストーブ入れると、換気計算をして出さなさいっていうようなことを言われることがあります。どれだけの排気、どれだけの吸気があって、それ、ちゃんと成り立ってるんですかみたいな。1回計算を出したことあるけど、まあどんなの出していいか、僕らもよくわかんないし。内装制限とかそんなの以外に、そういうな規制があるんですよ。消防では、各離隔距離とかが、決められてるところもあるけども。となると、どうしてもそれで、ほんとは薪ストーブ入れたかったんだけどって、悶々とする人がいる。

佐々木：ああ、そういう人もいますね。

山 口：思いを募らせている人っているんですよ。それと、FFとか、薪ストーブとかで検索すると、うちが引っかかるみたいです。全然宣伝してないのに。“やっと見つけました”と言われます。で、“しまった、見つけられてしまった”みたいな。あんまり見つけられると忙しくなってしまうので。去年なんかそれで、12台ぐらい売れた。

佐々木：台数は着実に増えてきてはいるんですか。

石 山：山口さんとしては、別に、そんなに拡大しなくてもいいしというスタンスですよ。

山 口：いや、収入は必要なんだけど、市場主義原理でガンガン売ればいいわみたいな世界に行くことに対して、私自身が疑問を持ってんだね。経営者としてはおかしいんだけど。

熊 澤：逆に、最終ゴールは、どういうところにあるんですか。

山 口：人間っていうのは結局、この世に生きて来て、金もうけしたから幸せになれるわけでもないし、食ってけないのは困るけど、人間として、健やかに、幸せに生きてくのに、経済成長なんて、そこそこでいいんじゃないのっていう気持ちはあります。僕が思っているのは、この市場主義経済に頼らない生き方かな。

コンビニができたり、お金が必要だったりすると、お金持っていないと、持っていない人間は貧しい人間という価値だけになってしまう。それはイコール、不幸な人間という先入観のようになってきてしまう。そうすると、今までの物はないけども幸福という価値観が消えてしまう。ほんで、お金もうけなきやってなってきた、食べ物も悪くなってきて。今のソビエトのコーカサス地方なんて、すごいね、長寿の国だったけど、今はもう急に平均寿命が落ちてたりしたりしている。だから、そういうふうになってしまうのね。日本はもうなってしまうから。

雪と生きる

増田智：80何歳っていうのが平均寿命っていうのは、あくまでも昭和一桁ぐらいの人たちでしょ。

山 口：しかも男のほうが亡くなるのが早くなるじゃない。

増田智：いや、頼保のお父さんは元気なの。

増田智：90歳まで屋根の雪下ろしてたから。91歳のときに頼保に手伝いに来てくれてって言って。

石 山：恐るべしだね。

佐々木：恐るべしです。

増 田：去年、屋根の融雪装置をやっとつけたんだよね。

増田智：250万さ。

山 口：250万もするんですか。

増田智：けどもう上がれないし、人に頼んでること考えたら。

山 口：雪下ろしせないかんような、豪雪地帯だと必要かな。池田みたいな。

増 田：町雪やから。

山 口：そんな要らないでしょ。

増 田：1回下ろしたら、これがまた川へ投げに行かなあかんの。

山 口：下ろす場所があまりない。大変なのか。屋根で溶かしちゃえば1番いいのよね。

石 山：あれ、でも、前もって、早めに入れなきや溶けきんないっていったよね。さきほど池田の山口さんち行く途中、屋根の端口が(雪の重みで)折れてたうちがいくつかあった。

山 口：新築の家で油断しててもね、新築の家で折れてるのがあってね。うちの大工なんかね、特需やって言って。

石 山：特需。

山 口：今年はずでに13軒も折れたらしい。案外ね、新築したからと思って、安心してるとこあるんだっ

てよ。

石 山：やっぱり下ろさないと駄目なんだね。

増 田：早いうちに雪降るから、雪が重いんだよ。

山 口：一番最初の雪が一番重いんだよ。最初の一発でやられてもう。

増田智：気温が高いと、重い。ぐんと冷えてからだと、軽くなるけど。

山 口：油断してるときにね。

増田智：氷点下じゃないうちに降ると。

石 山：雪降ったら、早いうちに下ろせって言われたもんね。2年目(2005年)のときすごい降ったんだよ
ね。

山 口：山がくびれてっからさ、ちょうど雲がこの辺で集まるんだよね。今年はでも多いんだよ、去年は
そんな降らなかったもんね。

増 田：去年は雪少なかったけど。

山 口：去年と一昨年だね。

増田智：去年なんて、土建屋はいくつか潰れるかっていうぐらい雪が少なかった。除雪の仕事がないから。

石 山：予算削減で除雪の回数とかも減ってるんでしょ。

増 田：減ってる。池田は今ちょっと温暖化してくれたほうがいいですよ。もうちいと温暖化してくれる
と除雪が楽になる。

石 山：南坂下でもそういう人いたわ。“地球温暖化で、除雪が楽だわあ”って言っていました。

山 口：世界的には寒冷化してるんだよ。

増田智：テレビで温暖化、温暖化っていうのはまやかしやとかっていうのをやってたよ。

増 田：温暖化って言うと、それに恐怖心を抱いて、一生懸命温暖化対策をやる企業が増えてくるから。

増田智：経済が回るんやて。

山 口：確かに冷えるって言う人もいるんだけど、あれ、言ってる人も結構いるよね。どっちがどっちなん
かようわからんのやけどな。

佐々木：わかんないですよ。

石 山：どこからどこの範囲、何年から何年を見るかで、またそれ違ってくるね。

田舎暮らしは忙しい

石 山：長生きすればするほど、不安だったりとか、誰が面倒見るとかね。そういうふうになってき
ちゃってるじゃないですか。だから、自分自身長生きするのが本当に幸せなのかってやっぱり考え
ますよね。

佐々木：殺伐と、ギスギスしてきてる感じがしますよね、社会が。

山 口：自由気ままに生きるのがいいと思う。今、経済で成功したって、もう走り続けられないといけない。
じゃあ、どういうふうにしたらいいかって言うと、結論的なことはなんもわからないけど。結局炎
を見たり、まったりとするというかね、そういう幸せを感じる時間というものが感じられる比率と
かパーセントを1日のなかになるべく増やしていくほうがいいのかなって。

増田智：でも田舎ほど忙しいことはないと思う。

山 口：ない。忙しいよ。

増田智：都会のマンションの一室にで住んでるほうが、よっぽど時間があるって。田舎の一軒家持ったら、
まず、一年中草むしりでしょう。薪の準備でしょう。これがものすごい大変。私たちが昔は、2人
で真剣に3週間ぐらいかければ、一冬分できたけど、今はもうそんな体力ない。今は、庭木屋さん
が剪定したやつを持って来てくれて、それをやるだけだから、まだ楽だけど。去年、うちもとうと

う薪割機買ったけれども。でも都会でジム行ってるよりは、よっぽど健康的だし。

石 山：忙しさの質が違いますね。

増田智：違う。だけど、まったく生きるっていうのは、大きな間違いだと思う。薪ストーブの前でうたた寝してたら、消えてまうんやでさ。

山 口：いや、そのね、短いまったくする時間を求めるがために働く。

増田智：いや、山口さんは、田舎で育ってるから、大変だっていう感覚がないって。頼保なんかもそうやもん。もう一年中草むしりやってる。

山 口：戻ったら、また生えてる。

増田智：ほんとに。もともとここで生活してた人たちは、要領良く、日が昇る前に草むしりしてとかね、もう生活のリズムのなかに組み込まれている。

山 口：2人とも都会なの？

佐々木：横浜です。

熊 澤：僕は東京です。

山 口：僕はそこら辺をどう考えるかって言うと、人間っていうのは進化の過程、宇宙の真実の結果だと思う。宇宙がどういうふうになんて生まれて来て、人間の存在が何かってわかってないでしょう。でも人間は、2本足で歩いて、昼行性で考えるね。進化の過程から物事を考えると、マンションに入って、エアコン効くところにいる、お金出しゃ買えるもん食っていったら、楽かもしれないけどその人種はもう滅びる。一生懸命働いて、体を動かす。筋肉を使わなかったら、もう退化するわけだから。朝日を浴びて、朝、日の出とともに起きて、一生懸命野原で働いて、毎日一緒な生活かもしれないけど、動物ってのは、そういうものですよ。そういうなかで感性が磨かれて、知恵が磨かれて、自然にバランスした生活をして一生を終わるわけでしょう。

食べものにしても、江戸時代に食ってないもの食うから病気になるのであって、近くにあるものを食べて、自分で作って、作るためには草もむしらないかん、耕さないかん。そういうサイクルで生きてくのが僕は一番間違いないと思う。病気も少なくなるし。

石 山：僕が南坂下の古民家に住んで、すごく面白かったことは、自分で工夫して、ちょっとしたトラブル、たとえば薪ストーブの位置が不便だから、移動させようとか、隙間できたから、何で埋めたらいいかなとか、そういうちょっとした工夫を重ねて、生活を少しずつ作り上げていけたことでした。自分のキャパシティを超えて、大雪で、もう雪が下ろせないというような事態になると、かなり大変でしたけど。だから、京都に住み始めたとき、日常生活にまつわるいろいろなことがすごく楽に感じました。その反面後ろめたい気持ちも湧いてきましたが。

山 口：世の中全体が本来のリズムから離れすぎているんですよ。で、だから、今は、スーパー行くと、冬でもキュウリとか売ってるでしょ。

佐々木：そうですね。そうですね。

山 口：だけど、キュウリなんてのは、夏の野菜であって、温室栽培か、地球の裏側から持って来るから食べれるものであって。

石 山：それが街にいと、全然、わからんのよね。

佐々木：わからなくなってます。

山 口：夏に体を冷やすものを食べるのは、畑で暑くなったときは食べりゃいいだけかもしれないけど、それ、じゃあ、100年前に季節もの以外のものを食べたかって言うと、そんな生活はできなかったわけですよ。冬にスイカ食べたり。というのは、DNAに刻まれてないことをやってるわけですよ。だから病気になるんです。それに対応ができないから。だから、冬は根菜類を食べたり、漬け物にしてとなる。こういう雪国の場合は、野菜が穫れないから、雪掘って出て来たキャベツ食ったりす

るのね。で、そういう生活をするのが正しいんであって、フォアグラ食ったり、なんかこのところ、キャビアを食ったりとかはちょっと。変なグルメが流行ってるけど、あれはフードマイレージの点からもおかしい。病気になるんですよ、それは。

人間がね、たとえば、30年とか50年で、そういうものに耐える、進化できるんならいいんだけど、人間のサイクルは、そんなに早く進化できないわけよ、体が。だから壊れる。今の糖尿病というのも、飽食の時代に対する備えがないから、それに合わせようとして進化して、その過程が糖尿病なんだな。飢餓に対する備えってのは、たくさんあるの、人間には。

山 口：だから、要は欲望で、欲に行きすぎて、人間の頭で考えることは、絶対に駄目や。

石 山：欲望が、そう、可能になっちゃったんでしょ。

佐々木：そうですね。

山 口：昔は1日1食ぐらいだったよね。今3食になっちゃったけど。コーヒーだってこれは本当いうと熱帯の飲み物。だから、ホットで飲んでも体を冷やす。ほいで今コーヒー一番飲んでるところって結構、フィンランドだっけ、どこだっけ。2番目にフィンランド大使館の人が世界で第2位の消費国。だからもう世の中狂ってるのね。

田舎の価値観

石 山：池田とかの若い人らってどう考えているんでしょうね。今の状況。

山 口：いや、そういう問題意識に徹底してる人もいるし、うちのおふくろがもうそういう感覚で、そんな本ばかりあるしさ。感化されて、電子レンジもほかしちゃったし。マイクロ波がよくないらしい。

増田智：中西さん言ったよな、IHおなか痛くなるってね。

佐々木：言っていましたね。

山 口：うちの母も電気毛布やめて湯たんぽにしようかって言っています。

増田智：薪ストーブでお湯湧いてるでさ。

山 口：おなかんとこ置いとくといいよね。

山 口：おなかんとこ足んとこぐらいが、2つぐらいあるといいね。

増 田：つま先ですよ。

山 口：旅館なんか行くと部屋全体が暖かいじゃない。ペレットストーブやら薪ストーブやらね、つけとくという方法もあるかもしれねえんだけど。エアコンだけだと息苦しくて寝られんし、喉が渇いてしょうがない。

ところでアフリカはどうなんですか。お風呂。シャワー。

佐々木：シャワーっていうかバケツで水を浴びる。

増田智：赤い色の水でしょ。

佐々木：赤いというか。

石 山：井戸がないところはね。

増 田：国によって違うよね。

佐々木：私が村にいたときは川の水で水浴びしていました。面倒くさいからもう川に行ってそのままやりましたけど、私は。

山 口：じゃあどんなところでも住めるね。

増田智：私はもうお風呂のないところは無理。

山 口：それはそれでそれなりのよさもまたあるの。

佐々木：実は赴任地の村と別に首都にワンルームの電気と水道がある部屋をかりていたのですが、アフリカの村のお母さんが、ある日訪ねてきたんです。その家を見て何て言うかなと思ってすごいときどき

してたんですけど、“ユウコ、こんなとこ住んでかわいそうやな”って。言われたときにすごいはっ
としましたね。彼女たちの価値観ですごい幸せっていうのは、家族がいてさっき山口さんがおっ
しゃったように、本当そういう忙しいけど自然のなかでの生きてることなのです。楽な都会の生活
を見て、“かわいそう”だっていう感性がすごいなと思いました。なんにもないアフリカの村より、
私たちのほうがすごい貧しい生活してるんだろうなと思って。

山 口：マンションということはエアコンとかそういうようなある生活ということよね。

増 田：そういうこと。

石 山：前提になってるじゃないですか。

佐々木：そうそうそう。

山 口：うちも今度、薪ストーブで床暖というのがあるんでぜひやったら見ていただきたい。

佐々木：あれいいですよ。

石 山：街で生まれてそこしか居場所がない人間って、そうするともうこの先行き詰まっていくばかりです
かね。

山 口：行き詰っていくでしょう。

石 山：人間の生活、暮らしがどうやって成り立ってるかっていうのは街にいると全然わかんない、実感で
きないのは、食べ物がどうやっておコメ作って、それがわかったのがすごいやっぱよかったと思
うし。

山 口：お金がありさえすれば、もの買えるから生活はできるかもしれないけども。

石 山：それしかできない。

山 口：人間の感性が磨かれないし、百姓っていうか、能力がないんだよね、結局。給料さえもらやあ、取
りあえず食うことには困らんみたいな感覚になっちゃうわけでしょ。

石 山：まちのかたちっていうのは、それしかないじゃないですか。

山 口：それっていうのは人間として欠けてるんです。生きる能力としては落ちてる。だからそういう人間
は病気になるって亡くなっているよ。日本のいいところは春夏秋冬があるわけだな。だから目まぐる
しく変わるから、人間もやっぱ目まぐるしく働かなきゃいけねえんだ。それはそのなかでヒトは割
り切ってくるし。北陸なんか特に鍛えられるわね。

石 山：南坂下の人から聞いたのですが、しゅうとさんが“2月はなんにもしないですと布団で寝てりゃ
あ金がかからんのやっ”ていっていたそうです。囲炉裏で火を“ちょろちょろ”焚くだけで。

山 口：昔は囲炉裏を焚きながら、わら細工を編んだりね。冬は漬物作ったり、みそ仕込んだり、もちをつ
いたり、炭焼きしたり。

石 山：時間じゃなくて天気とか自然によって生活サイクルが決まってくじゃないですか。

山 口：都会にいたら雪囲いなんてする必要ないでしょ。池田にいと雪落としをしなきゃいけない、雪囲
いをしなあかん、雪吊りをしなあかん。

熊 澤：いろいろ工夫しないと生きていけなさそうな気がするんですが。

石 山：町の人はずりたくてもできないからね。

佐々木：だから憧れはありますよね。

山 口：町の人はずりたくても感じるあって、田舎の人間だけでやってもなかなかうまくいかないときもあ
る。池田に移住してきた女性にも渋谷から来た人がいますよ。たとえばそういう人たちの感覚って
のも入ると、なおよくなるわけで。都会の人だって自分たちはできないけど、じゃあ、この量の食
材を作ってくださいと、その代わりに、形の曲がったのもなんでもいいから。全量買い取りするから
作ってね、みたいな。その代わりに無農薬にしてねとか。そういう信頼関係を結んで、保証してあげ
れば田舎の人だって安心して作るし。今、スーパーに買ったたかれて。

石 山：池田の農家は、こっばい屋に出してますか。

山 口：出してる。

佐々木：何ですか、それ。

石 山：こっばい屋って、池田町のアンテナショップが福井市内にあって。2006年のあたりで年商1億って言ってたけどね。

山 口：あそこはわりとってるみたいだけどね。

石 山：野菜とか芋の煮っ転がしの惣菜とか、毎朝トラックで出して。

山 口：農業公社がやっていますね。ゆうき・げんき正直農業つつってね。ゆうきっての有機のゆうきね。農業公社がね、土壌の成分分析まですんですよ。だから1回農薬使うと、3年ぐらいは復帰できないんです。池田ならではのやり方かな。春になったら、今度は雪解けしたらハウレンソウまいて、ジャガイモ植えて、順番ね。山、芽吹く前に木でも切ってきて薪作るとか。そういう流れのなかにあるから人間も進化するし。

石 山：忙しさが気分で決まって、雨振りそうだから、ここまでやっちゃおうだから、そういう忙しさになってるんですね。

山 口：夜中までfacebookしたり、パソコン、要は光もんでしょ。光もんを目に当てるとやっぱ、夜は交感神経が副交感神経にチェンジして、こういう炎をマルめて、いい感じで眠りに入って、朝またこう起きると、そういう体内時計を持つようにしないと。

石 山：薪ストーブの前にずっといてもあきないですよ。

山 口：あきないんだよ、なんか知らないけど。毎日炎見ても、炎見るのはあきないんだよ。

■ 考察

地域を構成する要素は多岐に渡るが、人間はその重要な一角を占める。しかし、地域には多様な人々が暮らし、人々考え方は決して一様ではない。

中西さん、増田さん、山口さんは福井県の越前市、池田町という近接地域に住み、「自然エネルギー」という共通の関心事を持ちながらも、それぞれの活動スタンスやその背景は異なる。

座談会を通じて興味深かったことは、それぞれの「篤エネルギー家」たちの主張の「奥行の深さ」であった。その奥行とは、福井（越前市、池田町）という風土における暮らしを軸とした感覚的なものでもある。なぜ「自然エネルギー」が重要なのか。そこには、エネルギー収支や経済的バランスといった科学的論理とは異なる説明がある。座談会から読み取れる「地域の論理」は、縦軸横軸を折り合わせてできる客観的論理だけではカバーしきれない、総体的かつ感覚的な面もある。

日常生活の中からとらえられた環境問題、座談会で「篤エネルギー家」たちが語った、定性的情報をどのように、地球環境学研究に結びつけるか。地域の人々との協働を目指す地球環境学研究を構築するためには、このことをもう少しつき詰めていく必要がある。

■ 文献

石山俊 (2013)「田舎暮らしからエネルギー問題を考える」, 石山俊・縄田浩志編, 『ポスト石油時代の人づくり・モノづくり—日本と産油国の未来像を求めて』, 地球研叢書・昭和堂, pp.169-198.

増田頼保・杉村和彦・内山秀樹 (2009)「「遊作」という経験」, 杉村和彦編『21世紀の田舎学—遊ぶこととやること』, 世界思想社, pp.77-118.

中山大将 (2009)「樺太植民地農政の中の近代天皇制—樺太篤農家事業と昭和の大礼の関係を中心にして」, 村落社会研究 Vol. 16, No. 9., pp.1-12.